

『英和対訳袖珍辞書』の研究

肖江楽

(1) 論文の目次

序章 近代日本初の本格的な英和辞書—『英和对訳袖珍辞書』	
第1節 『英和对訳袖珍辞書』の概要と特徴	1
第2節 研究の背景	6
第3節 研究目的と構成	12
第4節 研究方法及び意義	16
第1章 原稿から刊行へ	
第1節 原稿資料の紹介	20
第2節 原稿資料の解読	22
第3節 初版におけるメドハースト『英華字典』の利用	23
第2章 初版の刊行	
第1節 初版の序文及び試訳	37
第2節 現存する初版	38
第3節 Lehigh 大学所蔵本	39
第4節 天理大学所蔵原本と立教大学所蔵本	41
第5節 初版に見られる「眼球」をめぐって	55
第3章 再版原稿から刊行へ	
第1節 再版原稿及び解読	73
第2節 再版原稿における訳語の変化	75
第3節 再版原稿におけるメドハースト『英華字典』の利用	78
第4節 再版原稿における他資料の利用	82
第5節 再版原稿と刊行本の訳語	86
第6節 まとめ	90
第4章 初版と再版との比較	
第1節 再版の序文及び試訳	92
第2節 各項目の校正箇所割合	94
第3節 初版から再版までに見られる訳語の変化	97
第4節 見出し語の削除と増補	101
第5節 再版とメドハースト『英華字典』	114
第6節 まとめ	121

第5章	第3版—『改正増補和訳英辞書』	
第1節	『改正増補和訳英辞書』の序文	124
第2節	アメリカ宣教師等の紹介	126
第3節	新たに増補された見出し語	128
第4節	美華書館の刊行物	139
第5節	まとめ	143
第6章	第4版—『大正増補和訳英辞林』	
第1節	『大正増補和訳英辞林』の序文	147
第2節	研究方法の紹介及び研究対象	149
第3節	『大正増補和訳英辞林』の増補語	150
第4節	英和・和英辞書への影響関係	153
第5節	英華・華英字典との関係	157
第6節	まとめ	160
第7章	『英和对訳袖珍辞書』の周辺資料(1)	
	—ロブシャイト『英華字典』	163
第8章	『英和对訳袖珍辞書』の周辺資料(2)	
	—メドハースト『英和和英語彙集』	197
終章	研究回顧と課題	213
	参考文献	216
	感謝の辞	220

(2) 論文の要約

本論で取り扱う、幕末期に上梓された近代日本初の本格的な英和辞書と言われる『英和对訳袖珍辞書』は、1862年に、堀達之助らによって幕府洋書調所から刊行された。英語の学習が急速に普及しつつある当時において、わずか200部の辞書は、発行直後に売り切れの状態になった。1866年に、堀越亀之助が再版改訂の主編に任命され、柳河春三・田中芳男らが協力し、『改正増補英和对訳袖珍辞書』として開成所で発行された。英学の風潮が高まっていく時代において、改訂増補版の部数は当時の需要に応じ切れず、再び1867年と1869年に増刷された。一方、英学が勃発した地域の一つである薩摩の学生一前田正毅・高橋良昭は、1869年に、堀越亀之助の改訂増補版を基にして、辞書全体の見出し語と訳語にカタカナを振り、当時長崎にいた宣教師フルベッキの力を得て、訳語を全面的にチェックし、『改正増補和訳英辞書』として上海の美華書館で印刷・刊行した。この辞書は、薩摩の学生によって編纂されたことから、「薩摩辞書」とも称される。また、辞書の序文には「Third edition revised」と付け加えているから、『英和对訳袖珍辞書』第3版に当たるものである。さらに、1871年に、堀達之助の次男一堀孝之が、明治政府の官許を得て、『ウェブスター大辞典』を典拠とし、新たに8000余りの語を追加し、第3版と同じく美華書館から『大正増補和訳英辞林』を刊行した。序文には「Fourth edition revised」と記されているため、『英和对訳袖珍辞書』第4版に当たる。近代英和辞書の嚆矢とされる『英和对訳袖珍辞書』及び後続の改訂増補シリーズの刊行は画期的な出来事であったため、近代英和辞書の創生となるといっても過言ではない。

その後2007年に『英和对訳袖珍辞書』初版及び再版の編纂原稿が、名雲純一によって発見された。これは辞書がいかなるもとに成立し、そして改版され、さらに近代の訳語へと変貌していったのかを考察する上で、とりわけ絶好な資料である。本論では、第一級原稿資料の解説を出発点とし、近代蘭学から英学への転向及び発展、幕末明治初期来日宣教師における日本語研究、英華・華英字典と英和・和英辞書との相互浸透を明らかにしようとする。

序章においては、『英和对訳袖珍辞書』自体の紹介及び中国から伝来した英華字典の影響について整理する。

第1章は、「原稿から刊行へ」についてである。堀孝彦・三好彰・櫻井豪人が、原稿資料を通して、『英和对訳袖珍辞書』初版における「蘭和辞書」の利用を詳しく考証したのに対して、中国から伝来した「英華字典」、特にロプシャイトに贈呈されたメドハースト『英華字典』との影響関係については三者とも調査しなかった。そこで、筆者は十年前奇跡的に発見された初版原稿資料から読み取った情報に基づいて、堀達之助が一体どのようにメドハースト『英華字典』を参看したのかに焦点を当てて具体的に論述した。

第2章は、現存する『英和对訳袖珍辞書』初版についてである。特に、立教大学図書館所蔵『英和对訳袖珍辞書』初版の書き込みに注目し、幕末明治初期の宣教師における日本語研究状況及び文化交流史の方面にも調査を付け加えた。『英和对訳袖珍辞書』は、近代新漢語の研究にあたって、語史調査手順の一環として欠かせない資料である。そして、近代新漢語が、中国での翻訳語であるか、あるいは日本での翻訳語であるか、どちらにプライオリティーがあるかについて認定することは容易ではない。しかし、一つ一つの訳語が、いつ頃、誰によって造られ、どういう経路で現在の訳語に定着してきたかというような語史的な研究調査は非常に重要である。本章では、これらの点を視野に入れて、さらに訳語の造語法や、以降の国語辞典の収録にどのように貢献していったのかを含めながら、『英和对訳袖珍辞書』初版に見られる、近代新漢語の一つとされる「眼球」を取り上げ、考察した。

第3章は、「再版原稿から刊行へ」についてである。再版原稿資料の解読により、当初増補改訂された訳語が再び削除されたり、また新たに増補されたりしたことが判明した。特に、再版の校正者が、メドハースト『英華字典』を再び借用したことは、本研究によって始めて実証されたものである。これを根拠として、堀達之助は再版の校正作業に携わったと見るべき可能性も考えられる。また、本章では再版に新しく増補された見出し語の出自に対してつぶさに検証を行ったところ、当時の英学者が、蘭学の影響から脱皮する努力をし、直接英語と向き合っ、訳語を創出したことも看取できた。

第4章は、『英和对訳袖珍辞書』初版と再版との比較についてである。本章は、本論における最も中核的な内容と位置づけている。辞書の全体的比較を通して、初版と比べ、約8000語の見出し語の訳語が大幅に改訂されたことが分かった。そのほか、見出し語の誤植、品詞の間違いが修正されたものも見受けられる。今回の調査にあたって、筆者は独自で初版と異なる訳語リストを作成し、今後もこのオリジナルなデータ（初版と異なる訳語リスト）を改めてチェックし、いつか機会があれば、一般公開することを念願している。

第5章は、第3版『改正増補和訳英辞書』（即ち「薩摩辞書」初版）についてである。本章で取り扱う『改正増補和訳英辞書』（1869）は、「英和对訳袖珍辞書」系の流れという縦軸に置くと、3番目に当たるものである。第3版は原稿から初版へ、そして再版原稿から刊行までの改版作業と相まって、宣教師フルベッキの協力を得て、全面的にチェックし刊行されたため、近代英和辞書の流れにおいて非常に重要な功を担ったと言える。また、上海の美華書館で印刷・刊行された書物中の一冊という横軸で位置づけると、ほぼ同時期の『仏和辞典』や『獨和辞書』の編纂にも甚大な影響を与えたことが分かる。やはり、英学者の第一人者堀達之助が構築した英和辞書の土台（『英和对訳袖珍辞書』初版）は、それ以降の英和辞書・和英辞書に借用されただけでなく、「仏和辞典」、「獨和辞書」などの対訳辞書の編纂にも活用された。

第6章は、第4版『大正増補和訳英辞林』（即ち「薩摩辞書」再版）についてである。

本章では、主に辞書の新たな増補語を中心とし、「英和辞書」「和英辞書」及び「英華字典」などの辞書間における相互の影響関係を論じた。再版(1866年)、第3版(1869年)、第4版『大正増補和訳英辞林』(1871年)の比較を通して、増補語を品詞によって分類した結果、動詞・副詞・他の品詞より、大量の名詞・形容詞が求められていたと考えられる。また、本章の考察によって、『大正増補和訳英辞林』がロプシャイト『英華字典』を利用したという発想も生まれたが、Aの増補語だけの考察による結果では不十分であったと認識している。今後、『大正増補和訳英辞林』における、すべての増補語を調査し、両辞書間の影響関係を、さらに日中語彙交流の視点からも検証を続けていきたい。

第7章及び第8章は、『英和对訳袖珍辞書』の周辺資料に関する研究である。第7章では、堀達之助の『英和对訳袖珍辞書』を所蔵している宣教師ロプシャイトが、彼の辞書にある訳語を参看した可能性があるかどうかについて検討を加える。第7章では、主に辞書の訳語を中心として、関連するものをすべて洗い出し、分析を進める。第8章では、日本に行ったことが一度もないメドハーストが、1830年に刊行した『英和和英語彙集』を考察する。この語彙集は後に彼が編纂した華英・英華字典に影響を与えたに違いない。それ以降、堀達之助の『英和对訳袖珍辞書』におけるメドハースト『英華字典』の利用、ロプシャイトにおける『英和对訳袖珍辞書』の参看、ロプシャイト『英華字典』における「英和辞書」への影響、さらに20世紀初期「英和辞書」から中国への輸入というように、近代日中の語彙の漂流には、宣教師たちが果たした役割が極めて大きかったことに改めて目を見張る。

終章では、本研究によって明らかになったことをまとめながら、今後解明すべき課題を明記する。

以上の考察により、幕藩体制が崩壊しつつある幕末期に上梓された近代英語辞書の嚆矢とされる『英和对訳袖珍辞書』が、明治新政府が建立されるあけぼの期に再び改訂増補され、さらに明治新国家が形成された後の建設期にも改版されたが確認できた。これらの版を総合的に考察することによって、英学史上もさることながら、近代文化史・日中語彙交流史及び幕末明治初期の日本社会変遷の様子の一部を垣間見ることができる。まさしく沖森卓也・倉島節尚等編『日本辞書辞典』序文の冒頭に書き綴られている、「辞書は一国の文化のバロメーターともいわれる存在である」とのことば通りであろう。